

文壇資料

馬込文学地図

近藤富枝

講談社

文壇資料

馬込文学地図

近藤富枝

講談社

著者略歴

大正11年8月、東京日本橋に生まる。
昭和18年9月、東京女子大学国語専攻部卒業。
同年、文部省教学局国語科に入り、教科書編纂に従事。
同19年、NHKアナウンサー(第16期)を1年、結婚により家庭に入る。
昭和43年7月、宝文館より「永井荷風文がたみ」
昭和49年10月、講談社より「本郷菊富士ホテル」
昭和50年9月、講談社より「田端文士村」
を刊行。

文壇資料 馬込文学地図

© 1976

TOMIE KONDO

第1刷 昭和51年10月20日



Printed in Japan

落丁本・乱丁本は
お取替え致します

著者 近藤富枝

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号 112 振替東京 8—3930

電話 東京(945)1111

編集 株式会社 第一出版センター

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社島田製本

定価はカバーに表示してあります(セ)

はじめに

私はこれまで「本郷菊富士ホテル」と「田端」における、大正のはじめから昭和にかけての文士の集合と離散を調べ、そこに醸成された大正期特有の文士の気風を知った。が、さらに文士村として一層醇化されたのが、荏原郡馬込である。そのため、前二者の住人たちが、水の低きにつくがごとく、この地へと流れついている。

まず菊富士ホテルから尾崎士郎、宇野千代、つづいて広津和郎、高田保、間宮茂輔が赴き、また田端からは萩原朔太郎、室生犀星、北原白秋、竹村俊郎、平木二六などが移り住んだ。

さて馬込村においては、尾崎を囲繞する住人に川端康成、牧野信一、榊山潤、保高德蔵、筒井敏雄、室伏高信、今井達夫、藤浦洸、吉田甲子太郎、鈴木彦次郎、山本周五郎、矢部堯一があり、朔太郎、犀星の周辺に衣巻省三、三好達治、平木二六、竹村俊郎があり、その他北園克衛、倉田百三、日吉早苗、稲垣足穂なども、何等かのかたちで、この地に居を構えた。

そして更に周辺地区の山王、入新井、新井宿等に、高見順、日夏耿之介、子母沢寛、小島政二郎、佐多稲子、松村みね子、村岡花子、高田保がいた。また美術家には、小林古径、川端龍子、長

谷川春子、佐藤朝山、山本鼎、田沢八甲、真野紀太郎、関口隆嗣、青山熊二、池部釣、等の人材が
わずか数キロ四方の地区に集まっていたのである。

大正の末期から昭和にかけて、馬込文士村にはダンス、麻雀が流行し、宇野千代、萩原稲子、川
端秀子らが断髪し、やがて離婚旋風が吹きまくる。尾崎、榊山、保高、萩原家などでは、とうとう
家庭が破れた。

しかし、そうした現象のなかに、実はこの時代の女性たちの必死の自我顕現を発見する。また一
見のんき野放図を看板の馬込村だったが、それぞれ文士たちはプロ文学の攻勢のなかで、苦渋をか
みしめていたのだ。

この本は、大正十二年から昭和十一年ごろまで、約十五年にわたり、馬込を中心に繰り展げられ
た、これらの史実を主として、文壇人相互の關係を中心にまとめたものである。

目次

はじめに 1

第一章 風かおる九十九谷……………九

笹鳴の里 10

藁屋根の愛の巢 17

馬込放送局 24

第二章 インテリ作家たち……………三

村の麻雀派 34

湯ヶ島 44

梶井の恋 50

第三章 ダンスの家……………七

白秋と朔太郎 58

モガとモボ 65

詩人とその妻 72

第四章 断髪時代……………八

恋のシャッセ 82

臼田坂 87

放浪者士郎 99

第五章 ラプソディー……………一〇七

かへる日もなき 108

澄江ヲ夢ム 118

「浮気な文明」 126

第六章

満目蕭条……………

一三五

痴酔の人

136

別れる

145

円本騒動

152

第七章

魚眠洞……………

一五九

家をつくる

160

アパートの女

169

くちなし夫人

178

第八章

空想部落再現……………

一六九

風々雨々荘

190

バー白蛾

197

馬錦と夕風

204

第九章 うつりかわり……………三五

昭和十一年前後 216

夢のあと 228

おわりに 237

年表 241

主要参考資料 249

〈折込付図〉馬込付近略図

装幀 森下年昭

文壇資料

馬込文学地図



馬込の遠景

第一章

風かおる九十九谷

笹鳴の里

笹鳴や馬込は垣も斑にて 犀星

「坂のある風景は、ふしぎに浪漫的で、のすたるぢやの感じをあたへるものだ。坂を見てゐると、その風景の向ふに、別の遙かな地平があるやうに思はれる。特に遠方から、透視的に見る場合がさうである」

と、萩原朔太郎は「坂」という散文詩の冒頭にこう述べている。

九十九谷と称された東京府下荏原郡馬込村に、多くの文士たち及び文士の卵が住みついたのは、この浪漫的でかつ、のすたるぢやの風趣を喜んだものにちがいない。

「或る晩秋のしづかな日に、私は坂を登つて行つた。ずつと前から、私はその坂をよく知つてゐた。それはある新開地の郊外で、いちめんに広茫とした眺めの向うを、遠く夢のやうに這つてゐた。いつか一度、私はその夢のやうな坂を登り、切崖の上にひらけてゐる、未知の自然や風物を見やうとする、詩的な、Adventure に駆られてゐた」

と朔太郎は同じ散文詩の中で語っている。この「遠く夢のやうに這つてゐる坂はむろん馬込村のもの以外ではない。そして、私は多くの馬込文士たちが腕によりをかけて描写したどの文章よりも、この朔太郎の表現のなかに、馬込の魅力を発見する。

田端にも坂があった。馬込より規模ははるかに小さいけれども。そして、昭和十年代には鎌倉に文士の集合を見るようになるが、ここにも美しい坂が、谷々の間に走っているのを忘れることはできない。文士と坂にはどうやら深い関係があるらしく思われる。

「馬込村は土地の高低甚だ多きを以て、昔から俗に九十九谷あると称へられてゐる」と『通俗荏原風土記稿』（明治四十五年刊）にもまず断わつてある。

太田道灌が江戸城を造るときに、はじめ馬込の地を考えたという風説があるのは、天神山あたりに城を築けば九十九谷を一望に収め、守るによく、攻むるに難いという地形上の利点があるからであらう。

一日、私も大森駅西口に降り、駅前天祖神社わきの階段を上り、木原山をぬけて弁天池に出、谷中通りについた。谷中こそ馬込の入り口である。このあたり五本の指をひろげたように、木原山と天神山を中心に稜線がひろがり、その高地と谷を縫っていくつもの坂が走っている。こちらの坂をいきながら櫛比しひしている人家の間から別の稜線が隠見するのが眺められ、林と畑ばかりであった往時の広袤こうぼうとした風情をしのぶことができる。

三好達治は、馬込を評して、

「ただ青々とした大根畑にも、なかなか風情があった」

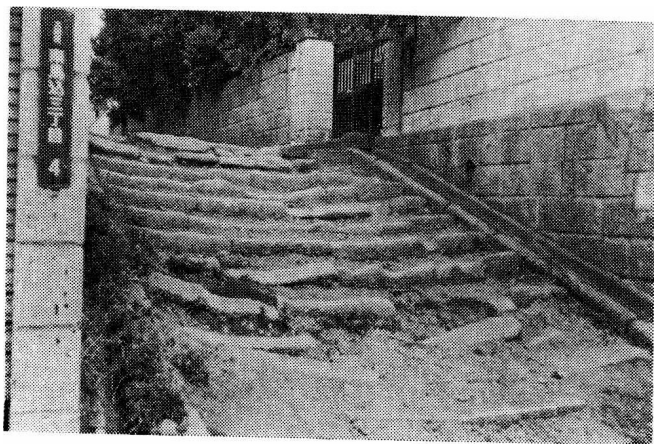
と言っている。詩人の言葉として信頼できる。

『通俗荏原風土記稿』にはつづいて、

「此地上古は満田郷に属し、中古は千束郷に入り、近世は馬込領内に含まれて居たのである。馬込は昔駒込とも書かれ、又一に馬籠とも書かれたが、何時頃よりとなく現今の如き文字に改められた。一説に馬込村は往古橋之庄真米村と称されたと云ふが是は古記録に見えぬ。」

とにかく此村は古くから開けた地であるといふ
しようこは、村内の千束附近の畑及び森林の土中
から往々古代の諸器物、若くは箭鏃の類を掘り出
すさうである」

と記されてある。それだけではない。中馬込には



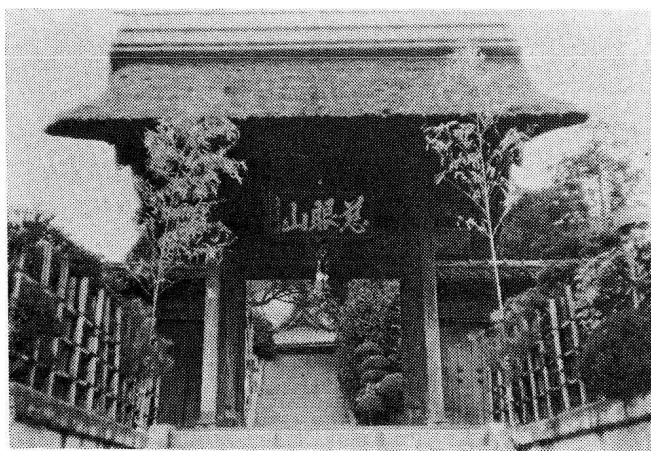
天神山の古い石段—吉田甲子太郎氏が近くに住んだ

貝塚が発見されているし、南馬込には台地端のローム層の中に掘られた横穴古墳も発見されているというから、由緒ある土地柄といえよう。

また旧称^{あざ}字中井（現在の南馬込三丁目）は古くは入り江の跡と伝えられ、将監ヶ谷（現南馬込五丁目）を中心としてこのあたり一帯は徳川時代は天領に属し、山林美、丘陵美に恵まれていたために、将軍家の狩場であった。

なお政治的な沿革をたずねると、鎌倉時代は梶原氏が領し、いまでも残る万福寺はその菩提寺と伝えられている。のちに小田原北条氏に支配が変わり、天正のころから徳川氏に移った。寛永十一年には芝増上寺領となり、寛永二年の検地によると禄高三百八十石と記録されている。

明治時代の馬込村は、戸数わずか三百三十九戸、人口は男女あわせて一九〇〇人であった。田約五十



慈眼山万福寺の山門

六町、畑百三十七町前後、山林六町余りに、これらの家があちらの丘陵や、こちらの谷かげにと点在していたらしい。牡馬三頭、舟車、小荷車七十八輛という記録もあり、産物は米・麦のほかに、粟・大豆・蕎麦などで、ごくありふれた農村だったと想像される。ことに半白胡瓜や大太三寸人参を品種改良の末産出したというから、篤農家がそろっていたにちがいない。

明治五年九月に新橋と横浜間に鉄道が開通した。新井宿に駅ができたのは明治九年六月なので、川崎、桜木町、品川の明治五年開設について古い。ただし駅名は新井宿でなくて大森と呼んだのは、新井宿では知名度が低かったせいである。もともと大森海岸に近い敷設を当時の鉄道院は希望していたが、文明を嫌う住民運動のために、人家の少ない新井宿が選ばれることになった……。

明治の後半になると、大森駅周辺に商店街が生まれ、森ヶ崎鉾泉の客や海水浴客など、東京郊外の観光地として脚光を浴びた。大森八景が選ばれたのは何時のことかで、誰が選んだのか不明だが、明治十七年に現大森駅西口前の天祖神社の隣に八景園があったことを思うと、江戸の末か明治のはじめにでも好事家が言いだしたもののだろう。

笠島夜雨 大井落雁 鮫洲晴嵐 羽田帰帆

富士暮雪 六郷夕照 蒼海秋月 池上晚鐘

の八景だというから、何のことはない近江八景のイミテーションである。しかし大森に都人士の寄せたイメージは、風雅の里という思いであったことがこのことで察しられる。